

なぜ江戸幕府はオランダの高性能な消火ポンプを導入しなかったのか？

フレデリック・クレインス

■ 私が日本で経験した火事

2017年冬のある日曜日の早朝、私は自転車で出かけた。自宅は京都の路地街にある。大きな通りに入るまではいくつかの狭い小道を通り抜けなければならない。進むにつれて、次第に濃い煙りに囲まれるようになり、目の前がまったく見えなくなった。

「これは霧ではない。火事かもしれない」。そう考えて、来た道を折り返した。しばらくして煙から抜け出した。振り返って様子を見てみると、全体像が掴めた。30メートル先に一軒家が丸ごと燃えている。

その家からは激しい炎が高く聳え上がっている。その時、悲鳴を上げる女性の声が聞こえた。家から脱出したその女性は家財の焼失を嘆いていた。男性も一緒にいた。どうやら、家の人々は無事だったようである。

向かってくる消防車のサイレンが遠くに聞こえた。「もう大丈夫だ」と思った。私は迂回して、再び目的地に向かった。その後、消防士たちが一生懸命に消火活動を行った。

目的地での用事を済ませて、3時間後にもう一度その場所を通った時には、火がほぼ消し止められていた。路地が狭いため、数台の消防が大きな通りに止まって、そこから複数の消火ホースが何本も火災現場に向けて延びているのが見えた。消防車は路地に入れなかったが、消火ホースのおかげで火は効果的に消し止められた。

いうまでもなく、消火活動において消火ホースは極めて重要な道具である。消火ホースがなければ、消防車の入れない狭い路地では、バケツでも使わない限り、鎮火に使う水は火事現場に届かない。大きな火事なら、バケツでは炎は止められない。

私が見た火事の場合、炎はすでに両隣の家に延焼しはじめていた。消火ホースがなければ、火事の範囲がどんどん拡大し、被害はもっと甚大になっていたはずだ。

■ 消火ホースはいつ、どこで発明されたか

ところで、消防において効力を発揮する消火ホースはいつから使われているのだろうか。今から約350年前の1671年7月29日にヤン・ファン・デル・ヘイデンというオランダ人がアムステルダムで革製の消火ホースの特許を取得した。それ以前にもヨーロッパで消火ポンプは消防活動で使われていた。



ヤン・ファン・デル・ヘイデンの肖像画（アムステルダム国立美術館所蔵）

しかし、旧型消火ポンプにはホースが付いていなかったため、消火ポンプに付属する水槽に水をバケツで補充する必要があった。これには多くの人手と労力がかかった。また、放水は水槽に繋がっている金属製の管から行われたので、消火ポンプを火事現場の近くに置かないと、放水した水が炎まで届かないという欠点があった。



旧型消火ポンプ（アウグスト公立図書館所蔵）

その後、取水用消火ホースの開発により、水源が消火ポンプから遠く離れていても、運河や川からポンプで吸い上げた水をホースで直接消火ポンプに送ることが可能となった。

また、1673年1月12日にさらに改良が加えられた。この時はじめて、放水用消火ホースが使用された。革製のホースには金属製のノズルが付いていた。この放水用消火ホースは消火ポンプの水槽に繋がっていた。



新型消火ポンプ（アムステルダム国立美術館所蔵）

消火ポンプに取り付けられた左右の腕木を数名がかりで交互に上げ下げすることにより、水がホースのノズルに送られ、そこから遠くまで噴水された。そのノズルを手にもって、消防士は狭い路地を通り、燃えている家屋の中に入ったり、屋根に登ったりして、火の元の消火活動に当たることができるようになった。

■ 江戸時代に消火ポンプがやってきた

画期的な発明だったことから、新型消火ポンプの利用は瞬く間にヨーロッパ全土に普及した。当時の日本にも、早い段階でこの新型消火ポンプを導入する機会があった。1690年8月に来航したオランダ船は二基の新型消火ポンプを搭載していた。

当時の日本はヨーロッパ諸国との交易をオランダだけに限定していた。オランダ東インド会社は長崎の出島に商館を設置していた。毎年の夏に、東インド会社のバタフィア本部（インドネシア）からオランダ船が日本に来航した。

貿易業務が終わった後、オランダ船は再びバタフィアに戻る。出島に残るのは十数人の商館員。そのうち、商館長と数人の商館員が、年明けに江戸参府し、将軍に謁見する。江戸参府は、貿易の許可に感謝を表すための恒例の行事であった。

謁見の際に、将軍に様々なめずらしい贈物を献上するのが通例だった。1690年に日本にもたらされた消火ポンプもその献上品の一つだった。江戸には火事が多く、甚大な被害をもたらすことをオランダ人はよく知っていた。

それらの災害を食い止めるのに非常に役立つ消火ポンプを献上すれば、第5代将軍綱吉が喜んでくれるだろうとオランダ人は考えていた。

■ 好評だった消火ポンプの実演

消火ポンプが舶載された時の商館長はバルタザール・スウェールスという人だった。彼は、オランダ人と日本当局との間の通訳や仲介を担当していた日本の通詞たちの要請に応じて、1690年8月27日に大勢の日本人の前で消火ポンプの実演を行った。

この実演に対する日本人の反応について、スウェールスは日記に次のように記録している。「水があまりにも強い勢いで大量に屋根の上を越えて噴き上がったことに日本人皆がびっくりしていた。これらの消火ポンプが江戸で歓迎されることを彼らは確信していた」。

1690年10月5日に両長崎奉行が出島を訪れて、消火ポンプの実演を見学した。彼らもまた、消火ポンプが江戸で歓迎されるはずだと満足そうに言った。消火ポンプを江戸へ運ぶ任務は新商館長ヘンドリック・ファン・バイテンヘムに託された。

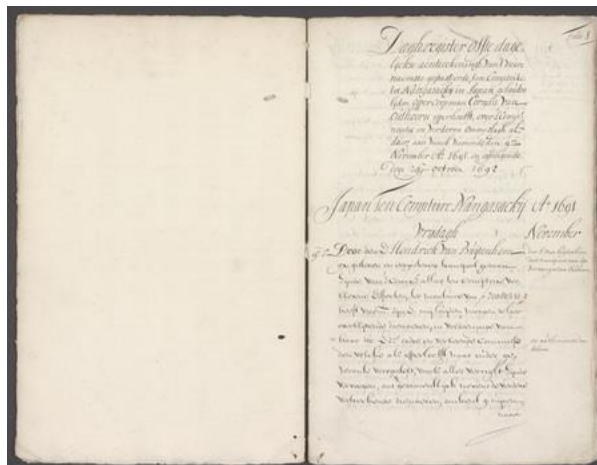
11月に通詞たちは消火ポンプの絵図を作成させた。老中にするためのものだった。消火ポンプの江戸への輸送についてもファン・バイテンヘムと通詞たちの間で相談が行われた。

■ 消火ポンプを拒絶する幕府

ファン・バイテンヘムは消火ポンプを、江戸へ送る準備を完了していたが、江戸参府に出発する直前の1691年1月5日に、長崎奉行から連絡があった。今回の参府では消火ポンプを将軍への献上品に含まないで欲しいという内容だった。長崎奉行・川口宗恒が消火ポンプの絵図を江戸へ持っていき、老中に相談した上で、翌年に献上すべきであるという判断だったという。

この後、商館長日記に消火ポンプに関する言及はしばらくない。ようやく、ファン・バイテンヘムと交代した新商館長コルネーリス・ファン・アウトホールンの日記に再び消火ポンプの件についての記述がみられる。

ファン・アウトホールンが、消火ポンプを江戸に送る指示の到来について通詞に問い合わせたところ、通詞は、そのような指示はなく、消火ポンプをバタフィアに送り返した方がいいと答えた。



ファン・アウトホールンの日記（ハーグ国立文書館所蔵）

ファン・アウトホールンはこの意外な展開に大いに驚いた。「消火ポンプは江戸で歓迎されるのではなかったのか」と彼は聞いた。しかし、通詞は消火ポンプの拒絶の理由については何も知らなかった。

1692年1月27日にファン・アウトホールンは消火ポンプに関する新たな情報を入手した。それによると、前年の江戸参府に際して、宗恒は消火ポンプの絵図を老中たちに提示したが、その後、ポンプを江戸へ送るべきかどうかについての回答は得られなかったという。

ファン・アウトホールンはこのような説明では満足しなかった。彼は長崎奉行の怠慢を疑っていた。「江戸では毎日火災が起こっているのに、日本人にとって必要不可欠な素晴らしい発明を彼らが快く受け入れないことはまったく理解できない」と彼は綴っている。

■ ファン・アウトホールンとは何者か

コルネーリス・ファン・アウトホールンはなかなか面白い経歴の持ち主である。彼は東インド会社職員の息子としてインドネシアのアンボンで生まれている。幼少時代にオランダにわたり、そこで教育を受けたとされている。

その後、再びアジアに赴き、バタフィア本部の出納係など東インド会社でつぎつぎと重要な役職が任された。彼にはウィレム・ファン・アウトホールンという兄がいた。コルネーリスが日本商館長を勤めている間に、ウィレムは東インド会社総督のポストに就いた。

外科医で知識人のケンペルが江戸参府して、綱吉に謁見したことは有名な話である。この時、ケンペルが同行した商館長はこのファン・アウトホールンである。ケンペルはファン・アウトホールンを高く評価していた。

ケンペルの遺稿には、ファン・アウトホールンについて次のように書かれている。

「博学多識かつ経験豊富であり、生まれつきの愛想の良さで、この国〔日本〕の気むずかしい人々の好意を引き出すことができた人であった。それによって、〔東インド会社の〕重役たちの事業に大変役立つ人材だった」（大英図書館所蔵ケンペル遺稿）

また、ファン・アウトホールンは日本の事物の収集に励んでいた親日家としても知られていた。

■ 江戸の町火消しの予知能力

40日間の旅の末、ファン・アウトホールンが江戸に到着したのは、1692年3月31日である。江戸でのファン・アウトホールンの気掛かりは、ほぼ毎晩のように起こる火事だった。4月4日の夜にオランダ人の宿のすぐ近くで火事が起こった。

「そのために、〔長崎奉行所の〕役人たちや我々の〔日本人の〕助手たちは毎晩交代で見張りをしている。彼らにとっては、大変苦労がかかっているはずである。そして、我々は絶えず不安を抱えることになっている」とファン・アウトホールンは綴っている。

7日の夜も江戸中が大騒ぎとなった。大勢の日本人が火事装束をまとって駆けつけてきた。ファン・アウトホールンは、大きな火事が発生したのだと不安になった。彼はそれについて役人に尋ねてみた。

しかし、役人は、火事はまだないと答え、次のように付け加えた。「強い南西風が吹いているので、この場合、火事がよく起こる。それゆえに、準備する必要がある」。その夜、役人の予言通りに火事が起こった。しかし、火は町火消したちによってすぐに消し止められた。



火事場に向かう火消しの隊（国際日本文化研究センター所蔵）

このように、火事は江戸では非常に身近なものだった。江戸の人々は常に火事を意識して、火事が起きた場合に備えていた。そのような態度を彼らは自然と身に付けていた。オランダ人は日本人の火事慣れした様子にとっても驚いていた。

続く8日と9日そして12日も、つぎつぎと新たな火事が発生し、宿の周りは大騒ぎとなったが、大きな被害は免れた。とはいえ、それらの火事はファン・アウトホールンの不安を煽るのに十分だった。

それに対して、オランダ人に同行していた日本人は非常に冷静に振る舞っていた。16日の夜中には大きな火事が発生し、「五つの大きな通りが全焼した」ことをファン・アウトホールンは役人から聞き知った。これにより、ファン・アウトホールンの不安は頂点に達した。「〔滞在中に〕絶えず火事に対する不安の念に駆られる」と彼は日記に綴り、嘆いている。けれども、これは序の口に過ぎなかった。

■ 地震に対する日本人の無関心

4月18日の朝6時半ごろにファン・アウトホールンは非常に強い地震を感じた。この時の日本人の無関心ぶりにファン・アウトホールンは大いに驚いた。「日本人はそのような地震にあまりにも慣れ切っているので、まったく気にしていない」と彼は記録している。江戸ではそのような地震が度々起こっているのに、日本人はそれに無関心になってしまったのだろうと彼は推察している。

その後の江戸滞在中も、ファン・アウトホールンの日記には、毎日のように火事や地震の記述がみられる。災害に恐怖を覚えながらも、将軍謁見を無事に済ませたファン・アウトホールンは4月27日に江戸から出発した。

彼は江戸で災害に遭わなかったことについて神に感謝をした。その日、川崎で昼食を取っている時にファン・アウトホールンは後を追ってきた役人の1人から恐ろしいニュースを聞いた。彼らが江戸から出た途端、大きな火が発生し、オランダ人の宿も非常に危険な状況だという。ファン・アウトホールンは幸運に感謝した。

江戸で絶えず起こる火事や地震は非常に印象的だったようである。ファン・アウトホールンが1692年10月28日に、当時東インド会社の総督に就任していた兄のウィレムに宛てた手紙で、江戸の滞在中に「複数の地震と火災を経験した」と綴っているくらいだ。

■ 消火ポンプが売れなかった「日本的な」理由

常に火事の危険にさらされている江戸において、消火ポンプは、消防活動の効率を劇的に向上できるはずだ。そのようにファン・アウトホールンは考えていた。しかし、幕府による導入は実現されなかった。消火ポンプはその後もしばらく出島商館にそのまま置かれていたが、送付指示が江戸から来なかったのも、バタフィアに送り返された。

消火ポンプはなぜ、日本で需要がなく、バタフィアに送り返されたのか。私は気になったので、ファン・アウトホールンの日記や手紙で答えを探した。

その結果、先に引用した兄ウィレムへの手紙で答えを見つけた。兄への手紙の中でファン・アウトホールンは、売却することは得策ではないので、消火ポンプを送り返したと伝えている。また、その理由についても記している。

その理由とは、通詞たちが売却しないように忠告したからだという。通詞たちの言い分では、その消火ポンプが「献上品として送られたと商人たちが分かれば、買おうとしないだろう」とのことであった。

つまり、消火ポンプが元々将軍に献上するための贈物だったと分かれば、商人たちは恐れ多くてそれを買わないと通詞たちは考えたようである。そういうことであれば、致し方がないので、バタフィアに送り返すしかなかった。

■ なぜ幕府は消火ポンプを拒んだのか

火事の多い江戸期日本で、オランダ人がもたらした消火ポンプは鎮火に大いに役立つはずだった。しかも、消火ポンプの実演を見た日本人は皆揃って感銘を受けていた。

こんなに役立つものを幕府が拒んだのはなぜか。私は、商館長ファン・アウトホールンと同様にその理由を知りたかった。しかし、オランダ側史料ではそれ以上の説明は見出せなかった。まして、日本側史料では、この事柄についての言及すら見当たらなかった。

ファン・アウトホールンは奉行の怠慢を疑っていた。しかし、私にはそのような説明が腑に落ちなかった。ついに、私の疑問を同僚の磯田道史氏にぶつけてみた。彼はしばらく考え込んだ後、次のような答えを出してくれた。

「当時の日本には大名火消しの文化が存在していた。消火ポンプを導入すると、それまで築き上げたシステムを抜本的に変えることになる。幕府はおそらく確立したシステムを変えたくなかっただろう」と。

磯田氏は続けた。「火消しは武士の名誉の文化を形成していた。町人のほうでも、火消しは皆の憧れだった。大名の火消しにとって、火との戦いは一つの戦闘行為として捉えられ、將軍への神聖なサービスでもあった。当時の消火活動は破壊消防が主だった。そのような伝統文化はオランダの技術で変えられるわけにはいかず、消火ポンプの場所はなかったのではないかと」。

消火ポンプに関する当時の幕府当事者による記録が残っていないので、磯田氏の見解はあくまでも推測の域から出ない。それでも、私は妙に納得した。これまで読んできたオランダ商館長日記からは、そのような日本人独特の精神性が浮かんでくる。勇敢に炎に立ち向かう江戸の火消しの姿には、いにしえの武士の面影が重ね合わされる。

日本人はすぐに新しいものに飛びつく。しかし、便利なものでも、受け入れない場合がある。これは日本人特有の文化の特徴の一つであると思つづく。日本人のそのような精神性、古武士的な面、私はけっこう好きである。

フレデリック・クレインス「なぜ江戸幕府はオランダの高性能な消火ポンプを導入しなかったのか？」（講談社現代新書 ウェブマガジン、2019年12月31日掲載）。